

卒後教育の重要性

池田 恒彦



私が本学の眼科学教室にお世話になって早くも2年が過ぎようとしています。日々臨床に追われながら、その立場上教育（特に卒後教育）について考える機会が多くなりました。臨床系教室の使命には、臨床、教育、研究の3つの柱があると言われてますが、そのいずれもが大学の教室として重要な使命であることは言うまでもありません。このうち、臨床と研究に関しては客観的評価が比較的しやすいように思います。たとえば臨床だと、外来受診患者数、手術件数などが毎月のように病院会議で報告されていますし、個人の実績も比較的簡単に数字になりやすいように思われます。研究に関しては、その成果が問われる学会報告や論文投稿数などで実際の形となって現れるので、さらに評価が容易だと思います。ところが教育に関しては、その指標となる基準が少なのが実情ではないかと思われます。そのためか日本の大学病院では情熱を持って教育に携わる教官が今一つ少ないように思うのは私一人ではないように思います。

若い教室員に種々の技術を指導するためには、教える側の情熱と教えられる側の謙虚さが非常に大切な要素だと思います。それは特に手術教育においてしかりであります。私事で恐縮ですが、私は網膜硝子体手術（対象は網膜剥離や糖尿病網膜症などの疾患）を専門にしている関係で、過去に何人かの術者を養成してきた経験があります。手術を教育するうえで、患者さんが不利益を被ってはならないので、だいたい次の4つの段階に分けて教育することにしています。まず豚眼などの動物眼を使用したシュミレーションを何回か行います。これで眼球の奥行き感や器具の持ち方など基本的な手技を練習します。次に実際に難易度の低い症例から執刀してもらい、危なくなった時点で交代するようにします。次第に技術が向上してくると、ビデオモニターを見ながらワイアレスマイクなどで指示を送りながら指導する方法をとります。最後に一人で執刀してもらい、何か問題が生じた場合にすぐに手術室に入れる状況を確認しておきます。このような段階を踏むことで、今まで10名強の硝子体術者を育成してきましたが、その大半の先生達が今も一線で頑張ってくれています。現在も教室の若手3人に手術指導をしています。自分の教え子達がたくましく育ってくれる姿を見るにつけ、それまでの苦勞が報われた気がしてついつい自己満足に浸っています。しかし、いざその成果を具体的なデータとして提示するとなるとなかなか難しいのが現実です。

今の大学の教官は臨床、研究、教育の3役をこなさなければならないので、非常に忙しいのも事実です。特に教室を主宰する教授が業績至上主義ともなると、教室員は最も評価されやすい研究指向になる傾向が強いように思います。別にそれを批判するつもりはありませんが、臨床や教育に力を入れる教室員も研究と同等に評価が受けられるシステムを作りたいものです。それが無理なら少なくともそのような領域で努力している人達をできるだけ正当な目で見える努力が管理者には必要ではないでしょうか。

教育は一人でできるものではなく、その人を取り巻くすべての人間が努力しなければならないことです。そのために我々の教室では今後もパラメディカルを含めた教室員同士が積極的に教え合う雰囲気は是非作っていきたいと考えています。

(いけだ・つねひこ 眼科学教授)

一流雑誌への挑戦

高松 順太

「何のために医学部図書館はある?」「医学の勉強をするためだ。」「それでは図書館報に掲載する原稿は何が良い?」「一般読書に関するエッセイよりも、医学に関するものが適切だろう。とくに論文についてのものがのぞましいのではないか?」以上が原稿依頼をお受けした時の私の自問自答です。実際、本学図書館に来て過している人たちで一般書を読んでいる人は殆どいませんし、90%の蔵書が医学論文です。このことを考慮したうえで、本稿では、「どのようにすれば自分のやった研究を一流の英文誌に載せることができるか」を書きます。かく申す私も、一流論文を書いたことはありませんが、小論文なら英語で少なからず書き、同時に沢山の失敗もしましたので、これを読んで下さるかたに少しでも参考になることがあれば、と願っています。



最初の重要なステップは投稿する雑誌の選定で、書き始める前に決めると良いです。「その雑誌へのチャレンジ」という目標が早期からでき、励みになります。高いimpact factorの雑誌を目ざしたほうがやりがいがあり、結果として良い内容に出来上がります。

論文を書いてゆくときの順序は、「Results, Materials and Methods, Discussion, Introduction」をお勧めします。奇異に感じるかも知れませんが、一度試して下さい。Abstractを最後にするのもひとつの方法です。最初に書くと、投稿までに何度も書き直すことになるので、時間を無駄使いする、とも言えます。

データをいかにうまく図や表に示せるかの工夫も重要です。図の表現方法を変えたり表の項目の並びかたを直したり、色々いじってみます。このとき、一流雑誌が参考になります。NatureやNew England Journal of Medicineは良くできているものが多いので、細部まで検閲して自分の図表の参考にします。なお、データの重複は評価を下げるので、図表の数を減らすよう心がけます。

Nativeによる英語のチェックは、私たち非英語国民の書く論文には必須と思います。全体を書き上げた段階で一度校正してもらい、さらに数回論文を練り上げたうえで、投稿直前にもう一度チェック、という二回校正が良いと思います。



論文を送る段階では、当該雑誌の投稿規定に合致しているか検閲し、足りないものがないよう気をつけます。体裁も大事です。私の留学したシカゴ大学の教授たちは、原稿の第一ページの上にきれいな半透明の紙をかぶせていました。ジーンズやスニーカーをはき体裁を構わないアメリカ人でさえもきれいに整えていました。私たち日本人は贈物の包装紙に気を使う習性があることも考えると、論文投稿においても配慮すべきだと感じます。

Editorから返事がかえってきて、「もう一度見てもよい」という内容であれば、早く書き直します。Editorからの第一報はfaxのことが多いので、彼の急いでくれている努力に報いるべく、当方も1ヵ月以内に送り返したいものです。

この時のreviewerへの返事文はとくに丁寧に練らねばなりません。またけんか腰や感情的にならないよう。例をあげると、最近私がimpact factorが1点台の雑誌の原稿をreviewした時、大きな問題点を2、3指摘したあと、「小さな問題点のひとつとして甲状腺機能の記載で“serum T₃, T₄ and TSH”となっているが、“serum T₄, T₃ and TSH”と変えるほうが良いと思う。」とコメントすると、著者から「その理由は何か。自分は今までいくつも論文を書き、“T₃, T₄”の順で書いてけちをつけ

られたことはない。」でした。私は、「先にも述べたように大問題ではないが、ホルモンの代謝経路を考慮するとそうすべきだ。実際、一流学者が一流雑誌に載せている論文にはT₄, T₃の順に記されているはずだ。」と返事しました。このようなreviewerに突っかかるような姿勢はとらないほうが良いです。また別の例として、もしreviewerが分っていない、間違っている、ということが分っても、その指摘は優しくすべきです。Reviewerは忙しい時間をさいて読んでくれたのですから、それに対する感謝を十分に表わすことが大事です。

最後に、堅苦しい内容を図書館報に書きましたが、小生は三階の奥にある旅行書も時々楽しんでいます。自宅ではNational Geographicの英語版（日本語版は写真の鮮明度がやや落ちているが）を愛読しています。図書館にもあれば良いな、と思っているのでよろしくお願いします。

（たかまつ・じゅんた 第一内科学助教授）

医療従事者に真に求められるもの - - 21世紀の医療環境 (9) - -

牧 彰



病院の基本理念である院是を[恕]と定めた赤穂市民病院

子貢問いて曰く「一言にして以て身を終るまで之を行う可き者有りや」子曰く「其れ恕か 己の欲せざる所を人に施すこと勿かれ」 論語 衛霊公第十五

門弟の子貢が「この一言だけは生涯守るべき信条とするに値する言葉はありますか」と問いかけると、孔子は「一生を通じて、少なくともこれだけは人として守るべきであることをあえて一言だけでと問われるならば、それはおそらく思いやりの心を意味する[恕]ではないでしょうか。自分がしたくないこと、されたくないことは、決して他人にさせることなく、また、仕掛けるべきではありません」と答えました。

物理学者であり、優れた随筆家でもあった寺田寅彦は、その著書の中で医師の条件を三つあげています。まずは、「健康である」こと。医師本人が病気や不健康では十分な診療に支障を来し、診断や患者への指示などにも著しく説得力に欠けることになります。次に、「十分な経験に基づいた知識と技術を持ち合わせている」こと。医師が専門職である限り、これもまた自明の理と言えます。最後に、これが最も大切なことですが他人を思いやる[優しい心]であると述べています。

医師や看護婦が、自分たちだけの力で病気や怪我を治すと思っているとしたら、それは造化の主に対する冒瀆というものです。生物には、生きようとする生命力、癒そうとする自然治癒力が自ずから備わっています。医療従事者の役割は、患者に本来備わっているこの[神秘的な力]を十分に発揮できるように最大限の支援をすることに尽きます。真に「患者の病んだ身体に宿る心を励まし、生命の尊さを自覚させ、生きる勇気を培う」ためにも、医師や看護婦はもとより全ての医療従事者に、この[優しい心]を持ち続けていて欲しいものです。

私が設計を担当した赤穂市民病院では、病院の基本理念である院是を[恕]と言う一文字で表わしました。[恕]とは、今からおよそ2千5百年前の儒者・孔子の言葉を借りるまでもなく、人間が人であるために不可欠な[思いやりの心]のことです。この他人を思いやる優しい心[恕]は、究極のサービス業である医療従事者にこそ絶対に必要不可欠です。何故なら、医療とは、病院を背景にして患者を主役とする人間愛のドラマなのです。

医療従事者に求められている[恕]は、キリスト教の説く[愛の精神]にも通じるのです。私が非常勤講師として奉職している梅花学園のスクール・モットーに、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。(マタイ伝7章12節)」とあります。受動的な儒教の論語に比べて、キリスト教のこの聖句は極めて能動的であり明解です。医療における[恕]とは、「奉仕の精神に則り[患者の人権]を最大限尊重して患者のために尽くす」ことです。しかし、実際の医療の現場では、患者が何を望んでいるのか解りづらいこともしばしばあることでしょう。そのような時には、患者の立場に自分自身を置き換えてみれば一目瞭然です。医療従事者は、求められるからではなく自ら率先して患者のために尽くすように心掛けたいものです。

全ての医療従事者に必要な適性は、本人自身の健全な心身であり、豊富な経験に基づいた広い見識と卓越した技能を前提として、あらゆる生命への尊厳や他人を思いやる優しい心・[恕]にあります。しかし、日本の医学教育の現状は、医療従事者に不可欠な生命への尊厳や患者とのコミュニケーションの在り方などへの配慮にいささか欠如しているように思えてなりません。21世紀は[人権の時代]であり、[共生の世紀]であるといわれています。地球上のあらゆる生態系と共生して今や危機に瀕している地球を救うためにも、他人への思いやりやあらゆる生命への尊厳こそ、医療従事者はもとより、人類が決して冒してはならない[永遠の聖域]であるといえるのではないのでしょうか。

(まき・あきら 元日建設社員 本学総合研究棟・本部図書館棟設計担当)

本から教えてもらったこと

柳 田 朋 子

私は、余り本をじっくりと読んだ経験がない。読もうと思ったことはあるが、いざ読み始めると直ぐに眠気が襲ってくる。次の日もその次の日も……。こうなると本を読まない期間が出てくる。すると私は話の内容を忘れてしまい、また始めから読む羽目になる。でも結果は同じ…。それを繰り返している。

そんな私が高校生だった時、その時に注目を浴びていた本を友人が買い、私にそれを読むように勧めてくれた。私は全部読めるか自信がなかったが、すごく興味があったので借りることにした。その注目を浴びていた本とは「五体不満足」である。その感想を述べてみたい。

その本の内容は私にとってすごく衝撃的だった。著者の乙武さんの写真が載っており、ドキッとした。「乙武さんの身体はどうなっているんだろう？」というのが第一印象だった。読み始めると「まえがき」として出生に関することが書かれていた。その中で乙武さんにも驚いたが、乙武さんの母親にも驚いた。母親が乙武さんと対面を許可されたのは生後1ヵ月後だったそうだ。母親が乙武さんを見て最初に発した言葉は「可愛い」だったと言う。すごい人だと思った。私だったら卒倒してしまうのではないかと思った。しかし、考えてみるとわが子の誕生を喜ぶ普通の反応なのだと思う。そして、乙武さんの母親はととても遅く理解力のある人だなと思った。その後も決してわが子を家に閉じ込めたりせず、積極的に社会に出していき、上手に育てることができているとも思った。乙武さん自身も、他人に体のことを尋ねられても上手に説明し、たくさんの友達を得て、20歳まで障害を感じなかったと書いてあった。このことに対して「本当に？」という思いだった。私自身何気なく障害を持つ人に対して、どこかでやはり障害者として差別の目で見ているのだと思う。しかし、乙武さんは自分の障害を一つの特徴だと表現していた。そう思えることはすごいことだと思う。自分の考えを常に持ち、決して自分を他の人と比べて悲観的になることなく積極的に人との

関わりを持ち、自分の道を歩んでいる人なのだと感心した。

また、本の中に海外でのことが書かれていた。そこでは車椅子に乗っている人が多く、障害者の存在が日常化していて、人込みの中にも他の人からジロジロ見られることはないと書いてあった。最近日本でも、少しは車椅子に乗った人を見かけるようになったかと思う。しかし、車椅子に乗った人と会うと周りの人達はジロジロと見る。これだけ見られれば見られた人は嫌な気分になると思う。これが今の日本の現状なのだと思う。

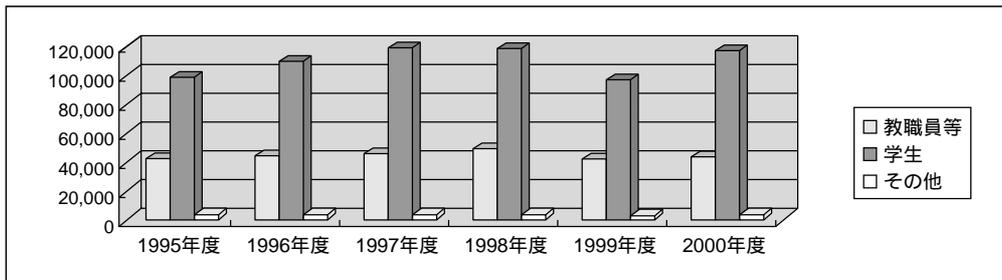
この本を読んで、私自身が障害者に対する理解、配慮が少なかったと感じた。駅で見かけても、どのように声をかければいいのかとか、誰かが声をかけるだろうと思い、その場をやり過ごしていた。頭から障害者はかわいそうと思ってしまっているところもあった。こんな思いが逆に障害を持つ人を苦しめ「健常者」と「障害者」とを区別し壁を作ってしまうのだと思う。どんな人でもありのまま認め、暮らしやすい社会をつくる必要があると思う。

全ての人を与えられた命を無駄にすることなく生きていく。そのためにも自分らしさを見失うことなく、自分に誇りを持って生きていくことを望みたいと乙武さんは書いている。自分らしく生きていく強さ、自分の役割に気づき行動を起こす逞しさ、この本は様々なことを私に教え、勇気を与えてくれた。この時始めて、本っていいなと思うことができた私だった。

(やなぎだ・ともこ 看護専門学校 第一看護学科 2年生)

図書館利用状況

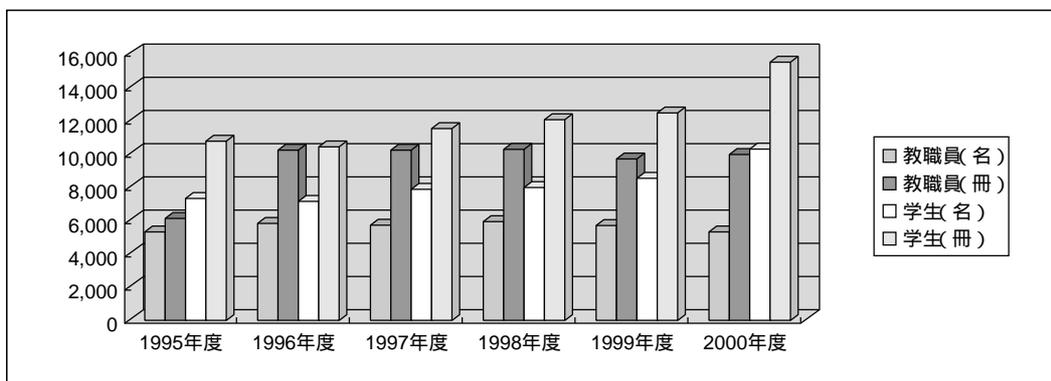
1. 入館者数



	教職員等	学 生	その他	合 計	1 日平均
1995年度	41,468	98,086	2,421	141,975	486
1996年度	44,001	108,530	2,220	154,751	541
1997年度	44,672	116,922	3,224	164,818	564
1998年度	48,451	117,799	3,182	169,432	584
1999年度	42,648	96,546	2,730	141,924	545
2000年度	43,180	116,293	3,299	162,772	559

1999年度に入館者数の落ち込みが見られますが、これはシステム更新のため入館者数を計測できない時期があったためです。それ以外順調に伸びていた数字が、2000年度には1997年度を下回ってしまいました。一つには、学内ネットワークの整備により、図書館へ足を運ばなくても文献検索や、オンラインジャーナルの利用ができるようになったことが考えられます。

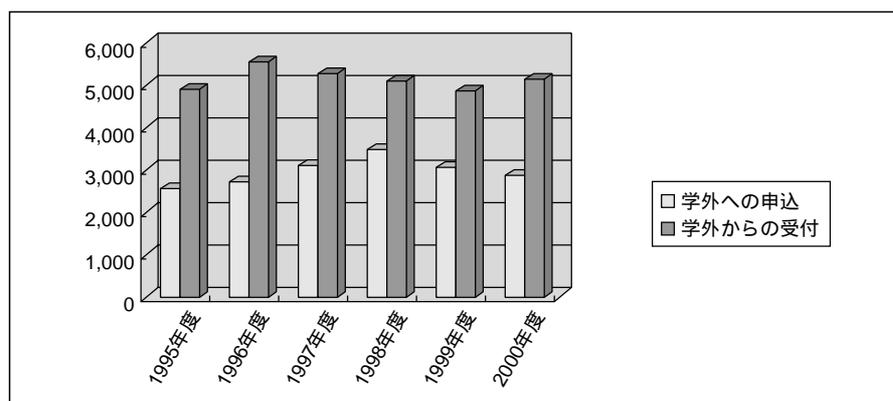
2. 貸出



	教職員(名)	教職員(冊)	学生(名)	学生(冊)
1995年度	5,300	6,055	7,240	10,735
1996年度	5,777	10,136	7,088	10,327
1997年度	5,686	10,141	7,807	11,474
1998年度	5,879	10,237	7,962	12,042
1999年度	5,670	9,637	8,484	12,473
2000年度	5,273	9,955	10,205	15,556

貸出に関しても入館者数の場合と同じことが言えると思います。学生の大幅な伸びに対し、教職員では減少気味です。これは、資料ニーズと利用環境の違いであって、図書館に魅力がないせいだとは思われません。

3. 相互貸借



	学外への申込	学外からの受付
1995年度	2,586	4,932
1996年度	2,760	5,583
1997年度	3,122	5,319
1998年度	3,502	5,111
1999年度	3,091	4,909
2000年度	2,890	5,144

学外への申込は、1998年度をピークに減少しています。2000年度は、前年度より7%減、ピーク時より12.5%の減となっています。やはり、オンラインジャーナルの影響が考えられるかと思いますが、それ以外にも情報環境に変化が起きているのでしょうか。逆に学外からの受付は前年度より4.5%増加しました。これは、国立情報学研究所(NII)のILLシステムに参加したことが、関係していると考えられます。



5号館（図書館は2階及び1階の両サイド）

兵庫医科大学図書館は兵庫県西宮市内南東部、阪神電鉄本線の武庫川駅下車西へ徒歩5分の地にあります。兵庫医科大学が昭和46年（1971年）に認可されたのと同時に、図書館も発足しました。

図書館は5号館の1・2階部分にあります。なおこの建物の1階中央部には学務課等管理部門があり、図書館1階部分は西側と東側に分かれています。3階には紀伊國屋書店の販売店と学生自習室や実験室・講義室があり、4・5階部分には教養系の各研究室があります。

図書館の開館時間は、平日午前8時30分から午後9時までで、土曜日は午前8時30分から午後4時30分までです。休館日は日曜日、祝日、年末年始（12月29日～1月3日）、創立記念日（11月22日）、第2・第4土曜日です。

図書館の入口は建物の2階中央部にあり、渡廊下で学内の他の建物とつながっています。入口から建物西方向へカウンター・事務室と続き、文献検索コーナーがあります。文献検索コーナーにはインターネット利用端末が4台あり、医学中央雑誌Web版を契約しており、またオンラインジャーナルもProQuestや直接契約等の雑誌が多数あります。またCD-ROM用端末3台とOPAC用端末が1台あります。CD-ROMサービスには医学中央雑誌、Current ContentsのClinical Medicine編とLife Science編、JCR、広辞苑や世界大百科事典が用意されています。さらにこの2階西部分には、指定図書・辞書等の書架、さらに医学専門書（2万冊余）の書架があります。南向きおよび北向きの窓際に閲覧机が並んでいます。西端に1階西側への螺旋階段と、図書搬送用の昇降機があります。この1階西には電動密集移動式書架があり、索引誌および一般教養図書（2万5千冊余）が収められています。



2階閲覧室内検索端末

2階東部分には入口側から、新聞・地図のコーナー、南側に面して新着雑誌コーナー、1階東側への螺旋階段と、図書搬送用の昇降機があります。北側には複写機室、視聴覚室があります。さらに東方向には新着雑誌書架、1999年以降の製本和・洋雑誌の書架があり、南北の窓際には閲覧机が並んでいます。図書館のカレント受入れ雑誌は和洋合わせて約1400種となっています。1階東側には1990年～1998年の製本和・洋雑誌を固定式書架に、1989年以前の製本和・洋雑誌を電動密集移動式書架に収めてあり、複写機も備え付けてあります。西東側とも1階部分は直接1階からは入れません。

同館では、本年4月より本格的な図書館業務の電算化システムが導入されました。既に1987年4月より書誌所蔵データベース作りが行なわれていたので、1987年以降に受け入れた資料はOPACで検索できるようになっています。1987年3月以前受入れの資料は書名及び著者名目録で探すことになっています。貸出手続きも電算処理化が導入され、4月からは図書館利用者カードで貸出手続きが行なわれています。ホームページも館員の方の手作りで、URLは<http://www.hyo-med.ac.jp/204.html/libindex.html>です。

(宮本)

訂正

OMNIBUS No.19号（2001.2.15発行）の他大学図書館訪問記（12）関西医科大学附属図書館の巻の記事に、不適切な記述がありましたので下記の通り訂正いたします。

13～14行目	午前8時40分	は	午前9時に
23行目	分館等	は	香里分室等に
下から2行目	分館	は	男山、洛西各病院と香里分室に

書評

ハエ・マウス・ヒト 原書名 La Souris, La Mouche, et L Homme

フランソワ・ジャコブ著 原 章二 訳 みすず書房 2000
東 克



著者 (F.Jacob) はoperon説で有名な生物学者 (1965年度 Nobel prizewinner) であり、“内なる肖像” “生命の論理” “可能世界と現実世界” などの著作がある。この本では、著者は科学の予見不可能性を何度も強調している。よく“21世紀の医学は” などと科学のある分野の未来予測が行われるが、これは無駄以外の何ものでもないという。本書の題の一部であるハエ (ショウジョウバエ) の遺伝子研究がマウス・ヒトなどの哺乳類の発生機構の解明に役立つとは、

最近まで誰も予想しなかったように、研究の予見不可能性は科学的探究の性質そのものに属していると述べている。また、研究活動における創作の重要性を次のように述べている。科学者は芸術家と同様、自分の理論を組み立てる上で、観察したものを選別し、沢山の現象から自分に妥当と思われるものを抜き出す。その意味では、科学的記述は発見であると同時に創作でもあるが、実験と批判的検証により、科学と芸術は分離する。

また、C.R.Darwinを悩ませた“眼の構造の進化”についてもふれている。私の研究材料・扁形動物プラナリアは一对の直径100 μ m足らずの目 (ピンホール型) を持っているが、昆虫は複眼、頭足類はカメラ眼を持っている。従来、ヒトのカメラ眼と昆虫の複眼には、構造、機構、発生のどこにも共通点がなく、両者はそれぞれ独立に進化した器官とみられてきた。ところが、著者も引用しているが、W.Gehring (1994) は、マウスの形態形成遺伝子Pax-6をショウジョウバエで発現させ、複眼をつくった。従って、両者同じ調節遺伝子を持ち、共通のプロトタイプから由来したと考えられる。

今年2月human genomeの配列がほぼ解明された。それによれば、ヒト遺伝子は30000~40000で大腸菌 (4300) よりは多いがショウジョウバエ (14000)、センチュウ (19000) と大差がない。著者のいうように、“生物種における形態と構造の多様性は、タンパク質の構造的多様性によるのではなく、進化は同じ材料を用いて、その組み合わせの違いで異なる形を生み出す” と考えるのが妥当のようである。

訳者による副題“生物学者による未来への証言”には若干異議がある。この本を貫く縦糸は、科学活動を含めて人間は未来の予見は不可能ということである。研究活動において研究が計画通りに進むかどうかの保証は研究終了までわからない。著者の言うごとく5年後まで予測される研究というのは、ある意味では最低の研究・ルーチンであるにすぎない。今話題の血友病患者のエイズ禍、東海村原子炉臨界爆発、諫早湾干拓問題などでも、当然専門科学者の意見を入れて、計画・実行に移されたはずであるが、彼らは予想もしなかったことが起こったと言い訳している。予想通り行かないのがむしろ当前で、それ自体責められるべきではないが、どんな計画にも予測不可な面があることを社会に発信しなかったことが問われる。だから、私が提案する副題は“生物学者による未来予測不可能性の証言”である。

短編ではあるが、この本は将来の遺伝子治療のあり方、医学研究のあり方、種々の社会現象を理解するために良き指針を与えてくれるので、是非多くの方々に一読を奨めたい。最後に著者の文章の一節を引用する。

遺伝的に同じ個人からなる集団は、伝染病や生存条件の劇的変化等々に翻弄される。数学や徒競走の能力の高い人間を選別するにせよ、個人の生物的特性を均質化しようとする試みは自殺行為。個人の遺伝的価値は遺伝子の特性ではなく、他人と違っているということにある。

(あずま・かつ 生物学助教授)

セミナー「ハイブリッドな学術情報の評価」に参加して

田嶋泰子

平成13年4月18日、大阪市立大学医学部医療研修センターにおいて、ISI主催、近畿地区医学図書館協議会、日本薬学図書館協議会近畿・中国・四国地区協議会協賛によるセミナー「ハイブリッドな学術情報の評価」が開催され、参加しました。

ISIは、Citation IndexやCurrent Contents (CC) で知られる会社で、当館でもCCとJournal Citation Reports (JCR) をCD-ROM版で購入しています。セミナーは3部構成で以下のようなものでした。

第1部：JCRの統計指標の見方

JCRは、Science Citation Indexの一年分のデータをもとに雑誌の引用回数を算出し、まとめたもので、学術雑誌の評価のためのツールです。これにより研究の動向やテーマの推移を知り、雑誌の重要度・影響度を把握することができます。図書館では雑誌の新規購入や継続打切りを決定する際の参考に用いますし、研究者の方々は論文の投稿先の選定に利用することができます。とは言うものの、実際にJCRを見ると細かい数字の列に混乱してしまいます。セミナーでは、新しくリリースされたWeb版JCRの画面を参照しながら個々の数値の算出のし方や、その読み方について説明を受けました。

第2部：Web情報と雑誌情報の統合

今日ではWebを用いることによりハイブリッドな情報へのアクセスが可能となりました。Current Contents Web版は媒体の特性を生かした検索機能が強化され、新バージョンではオンラインジャーナルのフルテキストへのアクセス機能も追加され、一次文献が迅速に入手できるようになるそうです。また文献情報のみならずWeb上にある優良な関連サイトへもリンク付けされていて情報基盤としての役割も持ちつつあります。

第3部：学術データベースの現状とその行方

社会の変化に伴って、生産される情報量は膨大なものとなり、個人が自分の力で自分に必要な情報を見つけ出すことは困難を極めるようになってきました。その分、データベースのあり方も変化し、情報の洪水の中から価値あるものを拾い出すための工夫がなされています。提供形態が冊子体からオンライン、CD-ROM、そして今日ではInternetへと移行して、データベースが単にデータを提供するだけでなく、関連のある情報へも到達できる情報基盤としての機能をもってきています。たとえば電子ジャーナルへリンクしてそのフルテキストを直接読んだり、学会などが提供しているWeb上のコンテンツへを検索して有効な情報を見つけだしたりすることも可能となっています。ISIが提供しているWeb of Scienceは、そのような幅広く情報を集めることのできる情報基盤ということです。

今回は、ISIが提案する情報サービスに関するセミナーでしたが、昨今では様々な機関が独自の情報サービスを開発しています。これからの図書館はそういった情報のための情報をうまく整理して利用者のニーズに的確に応えられるサービスを提供することが求められていると思われました。

(たじま・やすこ 閲覧係)



平成12年度図書館統計

年間受入冊数および製本冊数

	購入図書		製本雑誌		寄贈図書		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
図書館	1,390	202	1,175	3,292	386	360	2,951	3,854	6,805
教室図書	23	6	0	0	0	0	23	6	29
研究費	280	95	0	0	0	0	280	95	375
計	1,693	303	1,175	3,292	386	360	3,254	3,955	7,209
さわらぎ分室	830	3	44	207	1	0	875	210	1,085
研究費	91	232	0	0	0	0	91	232	323
計	921	235	44	207	1	0	966	442	1,408
合計 +	2,614	538	1,219	3,499	387	360	4,220	4,397	8,617

受入タイトル数

	購入		寄贈		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	
図書館	290	466	765	98	1,055	564	1,619
研究費	17	22	0	0	17	22	39
計	307	488	765	98	1,072	586	1,658
さわらぎ分室	33	47	3	1	36	48	84
研究費	2	8	0	0	2	8	10
計	35	55	3	1	38	56	94
合計 +	342	543	768	99	1,110	642	1,752

蔵書冊数

(平成13年3月31日現在)

	図 書			雑誌 (所蔵タイトル数)		
	国内	外国	計	国内	外国	計
さわらぎ分室	30,264	26,751	57,015	205	164	369
本 館	69,732	73,535	143,267	2,461	1,617	4,078
合 計	99,996	100,286	200,282	2,666	1,781	4,447

本学教職員著作寄贈

杉本 修 (本学名誉教授)

子宮内膜症 / 杉本 修 著 知人社 2001

A color atlas of hysteroscopy / 杉本 修 著 Springer 1999

勝岡 洋治 (泌尿器科教授)

前立腺肥大病：日常診療マニュアル / 勝岡 洋治 訳 医学図書出版 2001



1. 新規受入雑誌（本館）
Newsweek (English ed.) 2001.may +
2. 新規受入雑誌（看護専門学校）
EB nursing 1 (2001) +
3. 忘れ物コーナーについて

玄関を入ってすぐ右手に忘れ物コーナーがあります。図書館内で発見された忘れ物はここに保管しています。心当たりのある方は先ずここを探してみてください。保管期間は一ヶ月です。引き取り手のない物は処分させていただきますので、ご了承ください。なお、財布などの貴重品は、保安課で保管してもらっています。

4. 他大学図書館の利用について

一般的に大学の図書館は、いつでも誰にでも開放されているとは限りません。他大学の図書館を利用する必要がある場合、まずは図書館カウンターにてご相談下さい。必要に応じて紹介状発行等の手続きをお取りいたします。

図書館業務日誌

- | | | |
|--------|-------------------------------|------------------------------------|
| 1月 | | 参加（於、大阪コロナホテル） |
| 24日（木） | 日本医学図書館協会分担購入検討委員会（於、日本医科大学） | 16日（金）丸善ジャーナル講習会に館員参加（於、三井アーバンホテル） |
| 30日（火） | 日本医学図書館協会総務会（於、中央事務局） | 19日（月）日本医学図書館協会総務会（於、中央事務局） |
| 31日（水） | 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会（於、京都府立医大） | 4月 |
| 2月 | | 9日（月）新入生オリエンテーション（於、さわらぎキャンパス） |
| 2日（金） | 日本医学図書館協会企画・調査委員会（於、阪大生命科学分館） | 11日（水）医学図書館協会企画・調査委員会（於、大阪歯科大） |
| 7日（水） | 医学情報処理センター利用者会議（於、第二会議室） | 13日（金）看護専門学校オリエンテーション（於、大研修室） |
| 13日（火） | 医学情報処理センター運営委員会（於、第三会議室） | 18日（水）ISIセミナーに館員参加（於、大阪市大） |
| 22日（木） | 図書館合同運営委員会（於、会議室） | 19日（木）図書館合同運営委員会（於、会議室） |
| 3月 | | 20日（金）日本医学図書館協会理事会、評議員会（於、東大医学部） |
| 9日（金） | 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会（於、京都府立医大） | 27日（金）近畿地区医学図書館協議会例会（於、京都府立医大） |
| 15日（木） | 医学中央雑誌ユーザー会に館員 | |

編集後記

今回のトップ記事は、池田恒彦教授に、またエッセイは高松助教授にお願いしました。「二十一世紀の医療環境」のシリーズは、9回目になります。今回は新しい年度の最初の号なので、利用統計等の記事を掲載しました。その他多くの方に執筆していただき有難うございました。表紙のカットは、北村達郎氏に描いていただきました。OMNIBUSへの読者からの投稿を歓迎いたします。（茂幾）

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書館室報」

No.20号 2001年6月11日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社